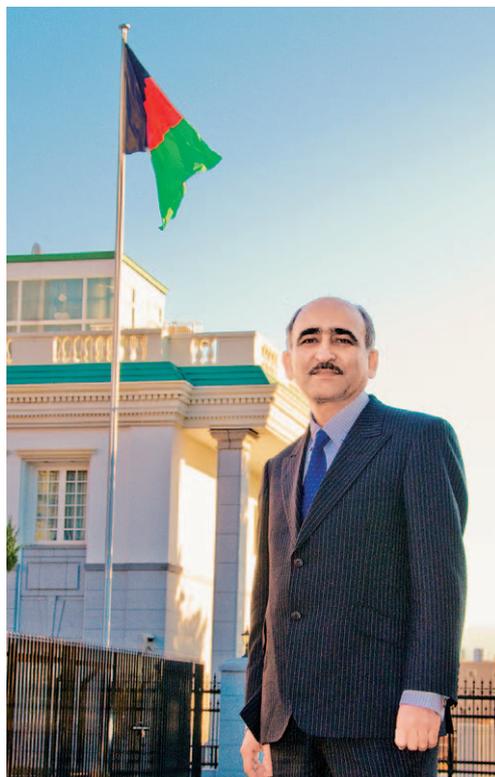


祖国の復興と世界の平和に もてる力を尽くしたい

社団法人日本・アフガニスタン協会 理事

フアルク・アーセフイさん 創価大学法学部卒業

毎年、世界中の国や地域から創価大学にやって来る数多くの留学生たち。現在、日本・アフガニスタン協会理事を務めるフアルク・アーセフイさんもそんな留学生の一人だ。アーセフイさんがアフガニスタンから国づくりの基礎である法律を学ぶために来日したのは、およそ三〇年前の一九七七年。駐日アフガニスタン大使館の推薦を受け、翌年四月に創価大学に入学。



「入学式で創立者のスピーチを間近に聞き、教育に対する情熱と温かな人柄に触れて感動しました。また、式のあとには、僕ら留学生一人ひとりの手を握り、『あなたには大切な使命があります。がんばってください』と励ましてくれました。その一言で、それまでの不安も消え、日本に来てよかった、一生懸命勉強して祖国のために尽くそう、自分の夢をかなえようと決心しました」

だが、祖国アフガニスタンでは、その二週間後にクーデターが勃発。七九年の旧ソ連軍の侵攻から、二〇〇一年の9・11アメリカ同時多発テロを経て、米軍による空爆へと続く長い戦乱の歴史が始まった。「アフガニスタンはもともと農業国で緑豊かな美しい国だったのです。シルクロードの時代には東西文明の十字路口と呼ばれ、バミヤンの石仏など文化的な遺産も数多く残っていました。この三〇

東京・港区にある駐日アフガニスタン大使館前で

世界の大学との交流を積極的に進める創価大学では、多くの学生を海外に送り出すと同時に、海外からの留学生も多数受け入れています。卒業生は、国際機関や大使館をはじめ、各分野で人間復興と世界の平和貢献のために世界各地で活躍しています。

年間ですべてが失われてしまいました。本当に、戦争は悲惨で残酷です」
中央アジアのアフガニスタンは、パシュトゥン人、タジク人、ウズベク人などで構成された多民族国家である。「でも、学校などでも同じくラスに様々な民族の子どもがいるのが普通で、皆が仲良しでした。多民族だからといって戦争になるとは限らない。結局は、様々な駆け引きによって引き起こされた悲劇だと

思います」
大学院卒業後も日本に留まったアーセフイさんは、法律に関する知識と堪能な語学力を活かして司法機関などで通訳として働く一方、日本とアフガニスタンの幅広い人脈を活かして民間外交を展開。「平和を願わない人はいません。結局は信頼関係です。これは創価大学で培ったものです」
祖国統一を願う人々とともにザヒル・シャー元国王を訪ねたり、アフガニスタンの現状を知らせる報道番組などのコマーディネーターとしても活躍。タリバン政権崩壊後、二〇〇二年に第一回アフガニスタン復興支援国際会議が東京で行われたときは、カルザイ大統領の通訳兼アドバイザーをつとめた。戦争が終わったとはいえ、復興はまだ緒についたばかりだ。アーセフイさんはこれからも、創価大学で学んだ「負けじ魂」で祖国と世界の平和に尽くしたいという。



創価大学の創立者池田大作先生は、世界の平和と人権を守るため、ボーリング博士やマータイ博士など、世界各国のリーダーや学識者と対話を重ねてきた。2006年には、北アイルランドの平和運動家でノーベル平和

賞受賞者のベティ・ウィリアムズ女史(世界子ども慈愛センター会長)と会見(写真)。同女史は、07年、アメリカ創価大学で講演を行い、「池田博士は慈悲と平和のリーダーで教育に尽力。心から尊敬する人物」と語った。